

2023年度おやさと研究所特別講座「教学と現代」  
「社会の中で問われる宗教の役割と使命」報告

金子 昭

おやさと研究所は天理教学の研究機関として、研究の成果を教内外に発信していくという社会的役割を担っている。そこで求められるものは、天理教教理のオーソドックスな理解の提供であり、またそれと同時に、現代の諸問題に対する新たな教理解釈の可能性の提示である。「教学と現代」は前者の教学の基本路線を踏まえつつ、後者の新たな解釈可能性を切り開いていく試みの講座である。

今回は、天理総合人間学研究室と天理ジェンダー女性学研究室の共催として、「社会の中で問われる宗教の役割と使命—格差・ジェンダー、そして宗教の公共性—」と題して、3月25日、天理大学研究棟にて開催。約40名が参加した。

最初に、愛知学院大学文学部宗教文化学科の熊田一雄准教授による「現代日本社会と宗教の役割」という基調講演が行われた。熊田氏は宗教社会学の立場からジェンダー論に造詣が深く、また天理教についても共感を持って研究を行っており、その成果を『格差社会の宗教文化—「民衆」宗教の可能性を再考する』(風媒社、2022年)で纏めている。

熊田氏は、まず現代日本社会の動向を示す一つの特徴として、女性が強くなったこと、そうした女性についていく若者の姿について紹介し、実はこの傾向は「女性の侠気(男気)」(女頭目)の伝統として近世から見られるものだと説明した。現代日本において、そうした事例はアニメのヒロインなどに現われていると言う。ところが、宗教の側では変化するジェンダー秩序への対応が立ち後れ、それが教勢の低下につながっているのではないかと指摘した。大本系諸教団で言えば、世界救世教と生長の家がまさにそういう傾向にあり、一方、大本の場合は歴代の教主夫婦が男女同権的な立場に立ち、それが教団の強みになっていると分析した。

そこで、現在再評価すべきは「侠気」の伝統であるという。この伝統は、「企業戦士」をやめられない男性よりも、「強くなった女性」と「それについていく若者」に継承されている傾向があるとし、実はこうした「侠気」は天理教の教祖にも見られると指摘した。教祖の「力比べ」を見聞した信者たちは、社会的不正義に対して暴力に訴えたり、迫害に対しても暴力に訴えたりする必要はなく、安心して「神にもたれて通る」信仰一筋の生活をしていくべきだという示唆を得たのではないかと、熊田氏は推測する。そして、現在問題になっているDV(夫婦間の暴力や児童虐待)に対しても、『教祖伝逸話篇』の137話「言葉一つ」などを紹介し、男性信者を強く戒めた教祖の姿勢を有効な処方箋として提示した。

また熊田氏は、現代日本を覆う新自由主義や格差社会の風潮の中であって、教会の「大きな台所」を活かした子ども食堂が天理教の社会貢献として「非暴力の『谷底せりあげ』」になると指摘した。そして、「おたすけ」に関して言えば、シッコロール(病人の立場)に落ち込んだ人がセラピスト・フッド(セラピストの立場)に立つことで心が安定してたすかるという現代

精神医学の考え方を紹介。「人たすけたら我が身たすかる」という教えが現代的意義を持つのではないかと示唆した。

このあと、おやさと研究所側から、「ジェンダー論の視点から」と題して堀内みどり主任が、また「宗教の公共性の視点から」と題して澤井真研究員が、それぞれ天理教学をベースにコメントを行った。

堀内主任は、まずジェンダー論は性別に関わる現象を問題にするだけでなく、むしろ社会の当たり前を疑う視座であると定義し、この議論が従来見えていなかった社会の格差や差別の検討を可能とする見方になると述べた。ジェンダー論とは、例えばそれまで「本能」や「自然」だとされてきた「男/女の二分法や異性愛」という考え方が、実は社会によって作られたもので、それが日常生活や思考の枠組みを規定していることを明らかにするものである。ジェンダーは、社会を男女の性別で二分する思考的特性と、それを当然のものと思わず社会状況とを含んでいる。ジェンダーバイアスは、就職活動のエントリーシートの「性別」欄から日常的に使う言葉にも見られるもので、それが男女の性規範や役割期待をも生じていると言う。

堀内主任は、その上で、「弱い者が苦しんでいるのを見のがせない気性」を意味する「侠気」という言葉にも、実はジェンダーバイアスが見出されると指摘。つまり、「侠気」は男らしい気質(男気)とされ、女が自然に備えているとされる気質(女気)と対比させられているのである。これに対して、天理教では、『逸話篇』28話「道は下から」、32話「女房の口一つ」、92話「夫婦揃うて」、137話「言葉一つ」、189話「夫婦の心」などの事例を挙げ、教祖は性役割に固執せず、互いに立てあい、たすけあう人間関係の基本が夫婦というつながりの中にあることを教え論されたと述べた。

一方、澤井研究員は、公共宗教学について紹介した上で、「宗教の公共性」を「天理教の公共性」と読み替えながら考察を進めた。天理教の公共性は「たすけ」という視点から読み解くことができるという。「たすけ」とは、①立教において親神天理王命が教祖を通して示された世界たすけ(世界の救済)であり、②陽気ぐらしを目標として、教祖のひながた(たすけ一条の道)を歩むことであり、③信仰者が人をたすける心で日々を生きること(ようぼく一人ひとりが教祖の道具衆)であるという3点に纏められる。

澤井研究員は、天理教が社会との接点を多くもつことで、ただ単に社会関係資本としての信用を得るというだけでなく、「たすけ」へと繋がる道筋をつけることができると主張。社会貢献の領域は至るところにあり、天理教信仰者と周囲の人々の接点はそうした領域に見られるが、あくまで軸足は教祖の道具衆としての「たすけ」の一環であることが天理教の特徴であると述べた。

この後、金子がコーディネーターとなり、講師の熊田一雄氏、また堀内主任、澤井真研究員をパネリストとして、フロアを交えての自由なディスカッションが行われた。発題者や参加者の間で活発な質疑応答や積極的な意見交換がなされ、充実した内容の講座となった。